

Stephen Cornell and
Douglas Hartmann,

*Ethnicity and Race :
Making Identities in a
Changing World.*

Thousand Oaks: Pine Forge Press, 1998,
xix + 282pp.

はら ぐち たけ ひこ
原 口 武 彦

はじめに

「期待に反して、20世紀は ethnic な世紀となった」(p. 1) という時代認識のもとに、英語圏では ethnicity 研究が、近年、きわめて活発に展開されつつある。

本書は「新世紀のための社会学」シリーズの一卷として、カリフォルニア大学で社会学を講じている S・コーネルとミネソタ大学助教授 D・ハートマンが共同執筆した ethnicity 概論である。アメリカ社会学系のこの ethnicity 論はアメリカ社会を中心に据えてはいるものの、その視野を広く世界に広げ、評者が地域研究の対象としているサハラ以南のアフリカの状況をもその中にとりこんでいる。

本書の ethnicity 論には、アフリカの現実がどのように映じているのか、評者のアフリカ認識に照らして検討し、そのことによって逆にこの ethnicity 論の理論的性格を明らかにすること、同時に本書の ethnicity 論が英語で展開されていることを意識し、英語で展開される ethnicity 論の限界を、評者の母語である日本語から導き出した「族」という概念に照らして明らかにすること、この2つが本書評のねらいである。

なお以下では、本書の中心的概念である ethnicity, ethnic group, race などの用語を、逐語訳、あるいはカタカナ英語に換えることなくそのまま用いる。

それは、この書評の第2の目的にかかわる意図的な措置である。

I 本書の構成

本書は以下の8つの章からなる。

- 第1章 ethnicity と race という難題
- 第2章 領域の設定——諸定義
- 第3章 固定的か流動的か——ethnicity と race に関する種々の見解
- 第4章 ひとつの「構築主義」(constructionist) 的アプローチ
- 第5章 アイデンティティ形成についての事例研究
- 第6章 「構築」の場——アイデンティティ形成の状況的諸要因
- 第7章 彼らがもたらすもの——アイデンティティ形成の主体的要因
- 第8章 変動する世界における意味と自己の形成

第1章の状況の概観、第2章の概念規定について、第3章では ethnicity 研究の既存の接近方法として「同化主義」(assimilationist), 「原初主義」(primordialism), 「状況主義」(circumstantialism) が批判的に検討され、第4章では本書の方法論的立場である「構築主義」(constructionist) が紹介される。第5章は ethnic アイデンティティの構築過程に関する5つの事例を紹介し、それを踏まえて、第6、7章では、もう一度、ethnic アイデンティティの形成にかかわる状況的(第6章)、主体的(第7章)諸要因が一般論として整理され、第8章は全体的な総括という構成をとっている。

II 内容紹介

今世紀を「ethnic な世紀」と認識する根拠として本書が第1章で提示している歴史的事例は、以下の11例である。

- (1)ナチス・ドイツのユダヤ人虐殺、(2)ナイジェリアのビアフラ内戦、(3)アメリカ黒人の公民権運動、

(4)1971年マレーシア憲法, (5)1970年末のテキサス沿岸におけるヨーロッパ系アメリカ人漁民によるベトナム人移入民排斥, (6)1980年代から激化したスリランカのタミール人問題, (7)ソ連邦の崩壊, (8)1990年代ドイツにおけるトルコ人など外国人労働者の排斥運動, (9)1993年秋, アメリカの大学における文化多元主義に対する反動, (10)カナダのケベック州独立問題, (11)旧ユーゴの悲劇。

そして本書は, 世界地図の中に本書でとりあげられる事例の発生場所を示し, 本書が視野を世界大に拡大して ethnicity 問題を検討していることを示し, この章のまとめとして, 「近代化——すなわち工業化, 都市化, マス・コミュニケーションやその他の制度的変化が, 人間生活や社会を変革するグローバルな過程——は, ethnicity に終止符を打つものと予想されていた。……しかしその予見は当たらなかった。……本書はそれがなぜかを理解しようとする試みである」(p. 9) という。

第2章では, 本書の中心的概念である, ethnicity と race について定義的な検討が行われている。

ethnic group や ethnicity という語は, この30年間に英語圏のアカデミズムばかりでなくマス・メディアにおいても頻用されるようになったが, その語源となったギリシャ語の ethnos がどのような経緯を経て, 現代英語に採用されるようになったのかを検討される。ethnicity はこの語に内在していた他者性のニュアンスが次第に消失し, 「単に他者ばかりでなく, われわれ自身をも規定するひとつの特定の方法を次第に意味するようになり, このような過程を経て社会学の術語となった」(p. 16) という。

そして本書は, 「ethnicity を共有された文化と同一視する」(p. 17) 社会学の一般的傾向には批判的であり, M・ウェーバーの古典的定義に内在した「過去が現在の自己概念をいかにかたちづくるか」(p. 17) という観点を継承し, 血縁, 歴史の共有などの要素を加味した, R・A・シャーマー・ホーン (Schermerhorn) の ethnic group の定義を支持し紹介している。

race については「實際上, 諸 racial カテゴリーは主要な皮膚の色グループに照応して設定されていて, そのボーダーラインに位置する事例は, 科学者の気

まぐれによって, それらの間に振り分けられたり, 新しい races にされたりしている。しかし, ……主要な諸 racial カテゴリー間の差異は, まさに皮膚の厚さほどしかない」(p. 23) という遺伝学者, R・C・ルウォンティン (Lewontin) の主張を紹介し, race の生物学的根拠を否定している。

しかし, それにもかかわらず人類が racial カテゴリーを仮定しそれを重視してきたことも歴史的事実であり, それは社会的理由にもとづき歴史的に形成された社会的構築物であるという。

最後に ethnicity と race の差異と共通性が検討されるが, その後の叙述においては, ethnicity と race は範囲の差異にすぎずアイデンティティ形成に関してはほぼ同質なものとして取り扱われている。

第3, 4章は ethnicity 研究の方法論の検討である。

歴史的にみると, まず生物学的進化論をくつがえす同化主義的見解が現実に裏切られ崩壊したのち登場したのが, 原初主義と状況主義であった。一言でいえば原初主義が「それ (ethnicity) は, 血に根ざすものであるから生き残る」としたのに対して, 状況主義は「それが状況および利害に根ざしているから生き残る」と主張しているという (p. 48)。

これら2つの方法の弱点を補い超克した第3の方法として本書が提示しているのが, 構築主義アプローチである (第4章)。

構築主義アプローチは「ethnic および racial アイデンティティが, つくられ, 再建され, あるいは時には年月の経過とともに解体されるその仕方に焦点をあてる。このアプローチは, 諸集団と状況の相互作用をその過程で重視する。このアプローチは, 原初主義がもつ重要な洞察力を保持しようと試みつつ, 状況主義の基本的有効性を認め, さらにそれに若干の活動主義的観点——諸集団が彼ら自身のアイデンティティを創造し形成することに果たす貢献——をつけ加える」(p. 72) という。

第5章では, この構築主義アプローチにもとづいて, アイデンティティ構築の多様性を示す5つの事例が紹介される。それには, (1)「状況の力」を示すアメリカ社会における黒人とアメリカインディアン,

(2)「(他者による)振り分けと自己主張」の間をゆれ動くミシシッピ州の中国系アメリカ人, (3)「濃厚(thick)な ethnicity が淡白(thin)化」した例としてのアメリカ社会のドイツ系アメリカ人, (4)「構築された原初性と ethnic な権力」を保持する南アフリカ共和国のアフリカーナ, そして最後に(5)「淡白な ethnicity が濃厚化した」事例として, 旧ユーゴスラビアのバスケット・チームのメンバーの事例である。

第6, 7章は, 前章の事例研究を踏まえて, ethnic アイデンティティの発現に寄与する状況的要素(第6章)——政治, 労働市場, 居住地など6つの要素——とさまざまな集団の主体的条件として, その集団の人口規模, 男女比率など8つの要素(第7章)が一般論として検討されているが, その内容には事例の豊富さという点を除いてはとくに斬新な論点はみられない。

全体を総括した結論として, 第8章は以下の文章でしめくくられている。

「ethnicity あるいは race には, 固有の善も悪も存在しない。それらは, 他のカテゴリーと同様に人間が創造したカテゴリーであり, その点ではとくに際立った重要性はない。それらを際立たせるのは, 人間がそれらをもって何をなすかである。これらのカテゴリーが用いられてきた, また用いられつつげている仕方である。21世紀にとって重要な問題は, ethnicity と race が集団的アイデンティティのカテゴリーとして使用されつつげるかどうかではなく, 諸集団がどのような種類の ethnic なあるいは racial な物語(story)を語り, その物語がどのように利用されるかである」(p. 252)。

III 若干の批判

前節のごく大まかな内容紹介からでも察知できるように, 本書はアメリカ社会学における ethnicity 研究の状況を把握するのに格好の入門書であるといえよう。ここでは冒頭にも述べたように, 日本語を母語とするアフリカ研究者の立場から, 本書に対する若干の異議申立てを試みる。

1. アフリカ研究からの異議申立て

アフリカで部族と呼び慣わされてきた族的集団について, 主にアフリカにおける国家形成とのかかわりに関心を抱いてきた評者は, 英語圏における ethnicity 研究がどのようなかたちで部族的世界に浸透してくるか, 注視してきた^(注1)。

その視点から本書にまず異議申立てを行いたいのは, ナイジェリアのビアフラ内戦の扱いについてである。本書の冒頭で, 現代の ethnic 紛争の悲劇的な事例としてビアフラ内戦をあげ, 「ナイジェリアの東南部に住むイボ人(people)が, 彼らの居住地をビアフラ共和国として分離独立を宣言した」(p. 1)と書かれているが, 正確に言えば, ビアフラの独立をイボ族の独立運動とみなしているのは観察者あるいは政府側の判断である。イボ族の反乱と自ら名のれば, それが北部に大量移住しているイボ人に迫害を及ぼすことになるのは目にみえていたはずである。イボ族は, 状況的にイボ族の独立を提起できる条件を有していなかったのである。

同様のことは本書の第3章の冒頭でかなり詳しくとりあげられているルワンダ虐殺の場合のツチ, フツの対立についてもいえる。これは, ルワンダという国の国家権力をめぐる抗争であり, ツチ, フツの名で多くの人々がその抗争に巻きこまれてはいるが, 両集団ともルワンダ国のツチ化, あるいはフツ化を志向しているわけではなく, 状況的にそれは不可能である。アフリカの部族という族的集団のカテゴリーは, 現代アフリカの植民地遺産としての国家群の配置状況からすれば, 政治的には密教的アイデンティティとしてしか成立しないのである。事実, 部族の名を冠した政治集団は, ごく一部の例外を除いて形成されていないのがアフリカの現実であり, これがアフリカの部族というカテゴリーの最大の特徴なのである。

本書はその点を見落として, アフリカの現実を ethnicity の一般論の中に無造作に包摂してしまっている。

それはアフリカの現実に対する認識の浅さだけでなく, 本書の社会学的方法論にも起因しているように思われる。それは, ethnicity とナショナリズムの

異同を論じた第2章に端的に示されている。「ナショナリズムと ethnicity は関連しているが同一のものではない。ナショナリズムを ethnicity から最も明確に区別できる点は、ナショナリズムの政治的目標である。ethnicity は、ナショナリズムになりうるし、典型としてのナショナリズムは真のあるいは仮想の ethnic な紐帯に基礎をおいている。ナショナリズムを (ethnicity から) 隔てるのは、主権と自決というその目標である」(p. 37)として、本書は、ethnicity 論の直接の考察の対象からナショナリズムを排除してしまっているのである。

さらに、ethnic group を「1つのより大きな社会の中に存在する1つの集団」(p. 19)と規定することによって、「1つのより大きな社会」(それは具体的にはアメリカ社会というように範囲としては国家とかわらない)を考察の域外においてしまう。そして ethnic アイデンティティの構築過程の考察に際しては、「国家政策が諸 ethnic あるいは racial グループに対して異なった対応をしている」(p. 190)かどうか、ethnic アイデンティティの発現にかかわる状況的条件の1つとされ、国家は与件化されてしまう。

アフリカの部族研究の立場からすれば、本書が世界大に視野を広げながらも、方法的には社会学の枠内にとどまろうとしていることが、本書の最大の弱点のように思える。アフリカの部族と呼ばれる族的集団の現代世界における位置づけは、本書で詳述されているアメリカ社会における土着アメリカ人の立場(pp. 108-113)に似ている。インディアンと総称される諸集団に本書が tribe という用語をあてているのは偶然ではないだろう。両者の最大の差異は、アフリカの諸部族の場合には、脱植民地化後、一応「自分たちの国家」という枠組みを有している点である。そしてその国家と部族とのかわりこそ、アフリカの部族にとって最も重要な現代的問題であると評者は考えている。

2. 日本語圏からの異議申立て

英語圏における ethnicity 研究と重なる問題領域をアフリカ研究の場で調査研究してきた評者は、日本語の民族、部族などの語に共有されている「族」という字に着目し、これを1つの方法的概念として

提起し、民族、部族、ethnic groupなどを、族的集団の歴史的諸形態と位置づけた^(註2)。また語彙的には、この「族」から派生する上記の「族的集団」をはじめ「族性」、「族化」などの用語を用意した。

日本語のこのような語彙をもって、本書での ethnicity という概念の使われ方を検討してみると、それが族性、族的集団の両者の意にまたがって用いられていることがわかる。

そもそも本書の表題は「Ethnicity and Race」となっているが、ethnicity という語の抽象性を考慮すると、それを race と並べるとはバランスを欠く。ethnicity に対置すべき等価の語としては、raciality というような語を造語するしかあるまい。他方、race を基準にすれば、ethnicity よりも ethnic group の方がふさわしいと考えられるが、この語句に内在する具体性が単数形での登場を阻むことになる。

本書は明らかに ethnic group から出発し、この語句に内在する具体性を抽象化するために ethnicity を登場させている。しかし ethnicity と ethnic group との関係は明確ではない。ethnicity は、評者が設定した2つの概念、「族性」と「族的集団」の間でゆらぎ、「族性」というほどの抽象性を付与されてはいない。まさに族的集団の意味で、ときには ethnicities という複数形も登場させている(p. 67)。さらに「族化」に関していえば、本書では「make us ethnic」という表現や、さらには「ethnicization」という造語も登場する(p.148)。

日本語圏からみると、ギリシャ語の ethnos を語源とする ethnic、そして ethnicity は、現代世界の現実を理解する普遍的、科学的方法として自らを確立しようと苦吟しているようにみえる。そして、本書をみるかぎり、それに成功しているとはいいがたい。その成功の鍵は、ethnic group を現代アメリカ社会の族的集団の一形態と位置づけることができるような、族的集団に相当する語を英語体系の中で創出することではないだろうか。

おわりに

評者は本書の検討を通じて、自分の方法的立場の

有効性に確信を深めることができた。その1つは地域研究の立場から、このような一般論や理論を評価するという視角であり、もう1つは自分の研究活動が基本的には日本語圏の中で、それを対象に行われているという自覚のもとに、英語圏における彼らの活動についても、日本語圏とはその広さと深さに格段の差があるにしても、やはり1つの圏内の活動として検討する視座を保持することである。とくに、ethnicity論のような問題領域において認識者の族性を自覚することの意味は大きいはずである。英語で、あるいは日本語でこのような議論を展開すること自体が、本書にいう「ethnicな・物語」づくりではないということであろうから。

(注1) 評者は、この観点からすでに以下の2著について検討を試みている。Marcus Banks, *Ethnicity: Anthropological Constructions* (London: Routledge, 1996) (『アジア経済』第37巻第6号 1996年6月所載の同書の書評) / Richard Jenkins, *Rethinking Ethnicity: Arguments and Explorations* (London: Sage Publications, 1997) (原口武彦「英語圏におけるethnicity論の展開」〔『新潟国際情報大学紀要』創刊号 1998年3月〕)。

(注2) 詳しくは下記を参照のこと。原口武彦『部族と国家——その意味とコートジボワールの現実——』アジア経済研究所 1996年 211～223ページ。

(新潟国際情報大学情報文化学部教授)